



医師国家試験合格発表の日。
結果確認中の
← 新中さんと ↓松尾さん

2年前、2012年に本学プロジェクトセメスターの第二回研修生としてガーナ拠点で寄生虫病学研究に取り組んだ新中さやかさんと松尾はるかさん(上写真)が、再びガーナを訪れました。卒業目前の2人は、日本に帰国後「夢にまで見た」というガーナに戻って来たのです。昨日まで野口研を走り回っていた印象のままの2人でしたが、ガーナ滞在中には医師国家試験合格発表もあり、4月からは社会人です。ガーナ人研究者達との再会も果たし、多忙だったプロセメ当時とは逆に、のんびりと過ごして行きました。今号は、そんな二人にガーナへの思いを寄稿して頂きました。研究活動報告、最近の出来事の後に続きます。お楽しみに。(志村)

最近の研究活動報告-合同プロジェクト会議

去る3月4日、感染症研究国際ネットワーク推進プログラム(J-GRID)の野口記念医学研究所-東京医科歯科大学間の合同プロジェクト会議が研究所内の小会議室にて行われました(写真1)。この合同プロジェクト会議は、毎年1回、両機関間で交わされるMOU (Memorandum of Understanding) に基づいて行われている共同研究の進捗状況を報告・討議することを目的として開かれています。今回の出席者は、日本側が研究代表者である国際環境寄生虫病学分野の太田伸生教授を筆頭に、ウイルス制御学分野から山岡昇司教授、そして現地派遣教員であるウイルス学分野の井戸栄治特任教授(筆者)と寄生虫学分野の鈴木高史特任教授の4名。ガーナ側は、Kwadwo Koram所長およびKwabena Bosompen副所長、それにウイルス学分野からJames Brandful上級研究員(元部長)、寄生虫学分野からIrene Ayi部長、Dziedzom De Souza研究員、免疫学分野からMichael Ofori上級研究員ら6名が参加しました。



写真 1



写真 2

会議では、J-GRID活動の目的と世界各国に展開されている現感染症研究ネットワークの紹介から始まり、その中でのガーナ拠点の役割などJ-GRID全般に亘るOverviewが太田代表より説明され(写真2)、その後MOUに添付された研究計画プロトコル毎に個々の研究の進捗状況が順次報告・討議され、合わせて導入された機器や予算情報なども報告されました。今回の会議では、単に形式的な議事進行が粛々で行われたのではなく、計画された研究をより推進するためには次にどのような実験研究をなすべきかなどといった、具体的で、かつ科学的に意義のある意見交換が活発になされたことが特徴で、とても良い会議が持たれたのではないかという印象を持ちました。ガーナ拠点も開設

から実質丸5年余りが経過し、益々成熟した共同研究が行われていると自負しております。更により多くの研究成果が報告できるよう、一層の努力を重ねなければと誓いを新たにしました次第です。(井戸)

最近の出来事-研究用機器搬入



写真 1

リフトを使って2階まで引き上げます。

研究をする上では、様々な試薬や器具は勿論のこと、時には大型の研究機器も必要となることは言うまでもありません。野口研は1979年建物完成以後、長年のJICAを通じた技術協力によって、また最近では私たちの感染症研究国際ネットワークプログラム(J-GRID)等によって持ち込まれた研究機器などもあって、西アフリカでは随一と言えるほど研究環境が優れた施設です。供与された機器はあるけれど故障して何年間もそのままに放置されているとか、機械はあるけれど検査試薬の供給が何年も途絶えたために今では作動すら怪しくなっているなどということが当たり前の貧しいアフリカの発展途上国の中では、例外的に保守管理状態が良いガーナの野口研です。それでも相変わらず電気事情は万全とは言えず、度重なる停電と復帰直後の過電圧や過電流によって研究機器の寿命は決して長くはありません。これはこのようなインフラ整備の整っていない地域では、一種の宿命として割り切るしかない問題の一つです。

研究を進めれば、自然に収集した検体の数も増え、また上記のような状況ですから相当に実験環境が整っているとはいえ、バックアップのためにも時々新しい機器を持ち込む必要があります。

丁度3月20日に、今年度の供与機材として日本で購入された2台の超低温槽が通関を終えて野口研に搬入されました(写真1, 2)。これまでのNewsletterでは、こうした機器搬入の様子を記事にしたことは有りませんでしたので、この機会にご紹介したいと思います。一口に機器搬入と言いましても、拠点教員による機種選定から始まり、製品価格の見積もり・購入、国外輸送の通関やガーナまでの保険関係を含む運搬手続きなど、踏み越えなければならないステップは国内調達ではありません。これらは主に東京サイドの方々の努力によってなされます。

航空便にせよ船便にせよ、いざ日本を出発したとなると、今度はガーナサイドで、これらの物品を受け取るための税関手続きや空港・港からの陸路運搬の手続きがあります。こちらの方は野口研のスタッフがいろいろと助けてくれるのですが、当然我々日本人チームとの連携が必要であり、拠点教員と事務スタッフ、わずか3人しかいない現地スタッフがこれらの作業に翻弄されることになります。それぞれのステップに関わる経費も決して少額ではなく、携わるワーカーの人数も状況によって変わり、必然的にその労賃等も増減しますから、逐時適切な対応が求められます。こうして多数の人々の努力と苦労によって、やっと機材が搬入されるわけですから、無事に設置が完了し、機器が動き出した時の感動は国内の研究室には決して味わえないものとなります。総じて、アフリカでの研究は、国内で研究に従事する時よりも遥かに広範な知識と対応能力を必要とします。その労苦が研究成果として実る時に更なる感動が生まれるのですが、そうした感覚は日本にいらっしゃる方々にはなかなか伝わらないかも知れません。(井戸)



写真2
P3施設へ運び込んでいる様子。

ガーナ再訪 医学科6年 松尾はるか

2年ぶりに Newsletter に登場させていただきます。

私は2年前の1、2月にプロジェクトセメスターの研修生としてガーナに滞在し、野口研にお世話になりました。その際は色々な出会いがあり思い出に残る滞在となりましたが、日中は研究室と寮近辺を往復するばかりで大学構内を探検したり街をぶらぶらと散策して生活を楽しむことはあまりできませんでした。

今回は学生最後の長い休みということで、研修当時2ヶ月間寝食を共にした新中さんと一緒に、ガーナの友人に会って街を楽しみ、ガーナの空気に包まれたいと思い、また来てしまいました。

ガーナ大学構内散策中にフーフー(キャッサバの餅)をついでいる現場に遭遇し、リサーチアシスタントおすすめのケンケ(トウモロコシの餅)のお店で作り方を教わり(写真1)、マンゴー畑で剪定の真似事をさせてもらい(写真2、3)、リサーチアシスタントに連れて行ってもらったレストランではおしゃべりで盛り上がり…。

道を歩いていると親しげに話しかけてくる人、いつまでも誘ってくるタクシーなどどれも変わっていなくて暖かさすら感じました。と同時に、土ほこりがたっていたところに道ができ、ドアや窓の壊れたタクシーがほとんど見られなくなったことなど変化も感じました。

私にとってガーナはどこか遠い発展途上国ではなくて、明るくて優しい人々と素敵な友達の住む身近な国となりました。再会と新しい出会い、今回も短い間にたくさんの方にお世話になり刺激を受けました。大学のカリキュラムとは関係なくやってき



写真1
ケンケの作り方を教えてもらっているところ。

た私たちが快くお世話してくださった野口研の先生方、スタッフの方々、そして一週間の間二人をずっと受け入れてくださった志村さんご家族の方、本当にありがとうございました。また、2人で来てでもいいですか？

(松尾)



写真 2

剪定体験したマンゴー畑と、そこで収穫されたマンゴーが使われている市販のジュース。



写真 3

ガーナへの思い 医学科 6 年 新中さやか

2 年振りに再びガーナの地を踏むことができ、とても嬉しく思います。

この 2 年間、ガーナにもう一度行きたいと思うと同時に、どうしてこれ程ガーナに行きたいと思うか、ずっと考えてきました。まだ明確な答えは出ていませんが、ひとつ日本と大きく違う点は「すきま」だと思います。これは 2 年前、ある先生が話して下さった事です、ガーナには時間的にも空間的にも「すきま」があります。何にも使われていない場所があり、ただぶらぶら歩く人、木陰で休む人がいます。犬やニワトリも自由に歩き回り、思うがままに時間を過ごしています。この「すきま」になんとかひかれてしまうのです。

日本に居ても忘れるどころか、ますます鮮明に強い輝きを放って心に訴えかけてきます。ただそれを追いかけて、今回ガーナまで来てしまいました。

「すきま」には何があるのか、どうして「すきま」が生まれるのか、それを確かめにまたいつの日かガーナを訪れたいと思っています。

最後になりましたが、今回の滞在中お世話になった志村さんをはじめとする多くの方々に、心からありがとうございました。(新中)



マンゴー畑



前回、それだけで食べたらまずくて、捨ててしまったケンケ。今回食べ方を教えてもらい食べたらおいしかった。

編集後記

新中さんと、松尾さんがガーナの事を思い続け、戻って来てくれた事は、とても嬉しい出来事でしたが、到着後に、医師国家試験の合格発表が滞在中にあると聞いて胃が痛くなるような思いがしました。発表当日、朝から緊張気味の二人から「(受験番号が) あった！！」という言葉聞いた時には、まるで自分が合格したかのように喜んでしまいましたが、これからは医師として忙しくなるし、今度はいつ来られるのかなと思うとちょっと淋しいような気もしました。新中さん、松尾さんの他、同時期にガーナでプロジェクトセメスターを過ごした、若生君、大原君、伊藤君、古川君、6人全員の合格おめでとうございます。またいつでもガーナに来て下さい。(志村)

ニュースレターに関して、ご意見・ご要望などございましたら、下記までご連絡ください。

編集：志村 文責：井戸、鈴木 ご意見ご要望などの送り先：shimura.kyoten@gmail.com